
ミスプリント

子守 小唄

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミスプリント

【Zコード】

Z9865V

【作者名】

子守 小唄

【あらすじ】

人生とか世界とか運命とかその他諸々に何の希望も抱いていなかつた俺が、『死』を切欠に生まれ変わった話。

この時季の夜は星が綺麗だ。

空気が澄んでいて雲も少ない。星の数も夏の夜空の比ではなく、プロキオンとシリウスとベテルギウスが描く冬の大三角形もとても綺麗だ。これで寒くなかったら最高なのが、それは贅沢というものだ。この寒さが夜空を綺麗にさせ、この寒さがなければ夜空は綺麗には見えない。寒さあっての星空と言つても過言ではないだろう。

俺は空を見ながら自転車を漕いでいた。

前力^トにはさつき一十四時間営業のコンビニエンスストアで買ったアイスクリームが一つ入った袋が入っている。今晚風呂上りに食べる予定だ。

普段なら真夜中に、しかも平日には、たかだかアイスクリーム一つのために家から出ることはないのだが、明日は特別な日だからだ。冬は好きだ。凍てつくような寒さも、降り積もる雪も、勿論頭上に輝く星空も全て好きだ。

特に理由は無いが、強いて言つならば風景が景色が最も美しく見えるからだ。

言つておくが、別に俺は絵師でもなければ詩人でもない。でも、綺麗と思う心はある。

俺は右手にある山を見た。夜泣山と呼ばれる山を。

夜泣山はあまり大きな山ではないが、洞窟がとても多い。その洞窟に風が吹くと「オオオオオオ」と、轟くのだ。まるで山が泣いたかのように。

それが名前の所以だと言われている。

この時季の夜泣山は雪に覆われ真っ白になつていて。とても、とても綺麗で美しい。

懐かしいな。

昔は近所の友達とよく、文字通り野山を駆け回ったもんだ。転ん

で血がでてもお構いなしで、日が沈んだら家え帰る。俺は家でゲームをしているよりもそうしている方が楽しかった。

対して今は、眺めているだけで山の土を踏む事はなくなつた。寂しい話だが、仕方のない話もある。

俺も高校生になつてから忙しい日々を過ぐしているからな。
まったく、成長するという事はいやだな。

なんて、爺臭い事を言つていると突然眩い光に照らされた。
驚いて手元がぐらつき自転車もぐらついたが、それも一瞬の事、
すぐに立て直し前をみた。

どうやらその角からトラックが曲がってきたようだ。

なんだ、と安心したのも束の間、トラックの様子がおかしい。
真っ直ぐ走つているのだが、スピードが異様に速く、気のせいか
此方に向かつて来ているような気がする。

いや 気のせいでもなんでもなかつた。

トラックは此方に一直線に向かつて来ているではないか！
不味い、と思い俺は避けようと思つたが遅かつた。

俺は体から真っ赤で綺麗な血を流しながら無様に死んだ。

聞いた話では死ぬ間際走馬灯を見るらしいのだが、あれは嘘なのか？

俺はそんな物見ていないぞ。やっぱり迷信だつたのか？
あ、でもその代わりに妙な物を見た気がする。
黄金色に輝く人影か、何かを。

一体、いつになつたら俺の物語が始まらんのぢやつ。

俺は人生は物語だと考えている。どこの詩人だ、お前は、と思つ方もあるかもしけないが、まあ聞いてくれ。

人生で起こるいい事と悪い事は全部でちょうど半分ずつになると、いう話はよく聞くが、それは当然だと思う。小説でも映画でも、ハッピーエンドは悪い事が起きない限り迎える事が出来ない。いい事ばかりの物語のハッピーエンドなんて、何の面白味もないしありがたみも無いだろ?バッドエンドだつてそうだ。悪い事が連續して起つた挙句にバッドエンドなんて物語、何が面白いんだ?それはきっとホラー映画か何かだろ?。バッドエンドを迎えるまでにいい事は絶対に一つは起こつていいはずだ。きっと次回作はまたいい事が起つていいはずだ。

皆が皆、人生ハッピーエンドで終えることが出来るとは微塵も思つてない。もしも皆ハッピーエンドを迎えていればバッドエンドなんて言葉は最初から存在しなかつただろう。そんな世界、もしもあれば皆がそこへ行きたがるだろ?

しかし、だ。悪い事はいい事が起つたときに喜ぶための布石なんだ。

だから人生は物語なんだ。

事実は小説より奇なり ジョージ・ゴードン・バイロンもいい事を言つ。

半世紀も生きていらない俺が言つのもなんだが、俺の人生はまだまだ序章だと思う。何度も現実を見て挫折した。何度も絶望を田の当たりにしてきた。

何度も死にたいと思つた。

そのせいでいつからか俺は自分を隠して、嘘をついて、戯けて、

皆を笑わせるようになった。ピエロのようになつた。正直苦しいが、今までの短い人生で学んだ処世術なのだ。仕方が無い。

「うでもしないと俺は消えてしまいそうだから。」

「うでもしないと俺は潰れてしまいそうだから。」

でも、俺は待つてゐる。鬱陶しい、悲しい、長い長い序章が終わる事を。

本編を迎える事を。

アニメや漫画のように空から少女が落ちてくるのもいい。世界でも何でも救つてやる。異世界の戦争に巻き込まれるのも構わない。死ぬまで戦つてやる。名探偵の助手になつてもいい。名探偵の手となり足となつて頑張つて働いてやる。

もつと現実的なものでもいい。

不治の病に罹つたならば諦めずに生きつづけてやる。

殺人事件に巻き込まれたなら、巻き込んだ犯人の顔を挙むまで馬鹿な頭フル回転させて推理してやる。

だから

お願ひだから

俺をこの苦しい序章から救つてくれ。

誰でも、誰でもいいから。

悪い夢 そう表現するのが一番良いだらう。適切と言えようか。記念すべき四年に一度の自分の誕生日にあんな悪夢を見るだなんて、しかも自分が死ぬ夢だ。縁起が悪い事この上なしだ。

もしかしたらこれは世に聞く予知夢というやつだらうか。もしそうならば俺は今日から超安全運転をしなければならないだらう。物語に巻き込まれてカツコ良く、いいや雑魚キャラのように不細工に死ぬのは全然構わないうが、こんな呆氣ない死に方は御免蒙る。

逆夢 も有り得ないか。いや、『死ぬ』の反対は『生まれる』だから、もしかしたら誕生日を機に生まれ変わるのかもしれない。

待ちわびたぜ、コノヤロー。

異世界だらうが魔界だらうが、ビニにでも行つてやるよ。なんなら救世主にだつてなつてやる。

「つてそんな事してると場合じやねえだろ」「ひ

俺は布団の中から腕を出して頭の上にあつた目覚まし時計を掴んで目の前に持つてきた。

現在の時間は十一時半を過ぎたところだ。

・・・・何?十一時半だと?

「はあ?!

俺は身体の上にあつた毛布と掛け布団の一層を乱暴に蹴つ飛ばすと勢い良く起き上がり、今度は携帯電話を取つた。

目覚まし時計が電池切れか故障だらう、と信じていたからだ。

しかし、携帯電話の画面に表示された時間は見事に目覚まし時計の分針と時針が指す時間と一致していた。もつと言つと、秒まで。「ヤベツ、完全に遅刻だ」

などと言いつつ俺は急ぎもせずに暢気に大きな欠伸をした。

今から超ダツシユで準備して学校に向つたとしてももう四時間日の半分が終わつていいだらう。学校の校則としては授業に途中から出たとしても、開始時間から一十分経つていればそれは欠席として扱われるのだ。加えて四時間目が終わると五時間目までの間には学生の救い、昼休みがある。急ぐ理由なんてこれっぽっちもないのだ。

俺は座つたままで伸びをしてから制服に着替えようと服を脱、こうとした時ある事に気付いた。

現在、俺が着てるのはパジャマではなく、パーカーにジーンズという姿だった。

妙である。

俺はどれだけ疲れてようが、どれだけ眠からうが、パジャマを着て歯磨きをしないと寝れないという妙な『習慣』がある。最早病気ではないか、というレベルの『習慣』が。

なのに俺はこんな格好で、しかも寝坊をするぐらいグッスリと眠つていたのだ。恐らく電池も切れおらず、故障もしていない事か

ら考えれば、目覚まし時計は七時に叫ぶという己の仕事をしたに違いない。だとすれば、それすら気付かないほど深い眠りについていたのだ これを妙と言わずしてどう言えばいいのだ。

何があつたのだろうか。まさか夢遊病？

「つて考へても仕方ないか」

そんな事考へても一向に答えなど出でこないのが目に見えている。考へるだけ無駄だ。

俺はとりあえずパー カーとジーンズをその辺に脱ぎ捨て、壁に掛かっていたハンガーと制服をとつて、カツターシャツに腕を通した。

入学当初はネクタイを結ぶのにかなり手間取つたのだが、もう慣れたものだ。明後日の方向を見ながら結んで締めると、服についた埃などを払つて、壁に向つっていた状態から後ろを向いた。

すると、視界の隅に妙なものが見えた。

者？物？まあどちらでもいい。

問題なのはその『もの』の形と数だ。

まずは一つ目から処理しておこう 少なくとも人間の形をしており剣道着のような紺色の着物と袴を同じく紺色の穿いている。体格は俺と変わらないだろう。顔には般若の面を被つている。まるで人形を大きくしやように、静かに正座をしている。人間 なのだろう。いや、だとすれば完全に不法侵入だし、それにしては堂々としきぎてる。服装、というか見た目も時代錯誤すぎる。もしやお化けか幽霊の類のものか？

次は二つ目だ。「イツは一つ目よりも遙かに怪しいし 怖い！！

一つ目の青年の頭の上にふてぶてしく膝を立てて座つており、その姿は何に例えればいいくらい不思議だ。まずは、きちんと四肢がついており、それには五本の指もある。それはいい。だが、四肢が何についているのかといふと、胴ではなく頭についているのだ。頭から、手足が生えているのだ。何だ、コイツは。頭も、禿げており、皺の刻まれたその顔はまるでオッサンだ。これだけ言葉を並べ

て不思議さを並べているが、一番不思議で謎なのは ずっとオッサンが此方を向いて二コ二コしているのだ。まるで、可愛い孫を見るかのような田で。コイツは置物と考えていいだろ。さもなければお化けが幽霊か。もしかしたら新手の窃盗団かもしれない。時代は日々進化していると言つてしまつて冗談を言つてている場合ぢゃないんだよ！！

「あ・・・・・えーっと」

状況が掴めない。

落ち着け、俺。とりあえず状況を整理しようではないか。

まずは、俺の部屋はいつもながらに小説や漫画本やDVDで散らかっており脚の踏み場もなく、唯一まともに立てるのは布団がある範囲とその他残された隙間だけだ。そして俺が先ほど眠っていた布団の頭の上にはご丁寧に本やDVDを除けて青年（いや、少年かもしれないが今はどうでもいい）が綺麗な正座をしている。放つておいたら茶でも嗜みそうな、綺麗な正座を。置物のようだ。そしてその上には、手足の生えたオッサンフェイスの頭が二コ二コ微笑みながら此方を見ている。

「・・・・・」

整理してみてもまつたく状況が掴めん！！

だが、一つ言える事がある。コイツらは無断で俺の部屋に入った。仮にコイツらが幽霊やお化けの類だつたとしても、それは変わらない。

ならば！！

俺は慌てて逃げるわけでも、ましてや冷静に警察に通報するわけでもなく、足元に落ちていた木刀を拾い上げると剣道の中段の構えをしてた。不思議を搔き集められて出来たような二体に向つて。

『相手』との距離は遠く、大きく振り上げて飛び込み面をしたとしても、届かないだろ。し、その隙に逃げられてしまうだろ。もしあたつたとしてもダメージは少ないはずだ。俺はそんな馬鹿な真似もしないし、出来ない。俺の身体で唯一出来るのは、突きぐらい

だ。

俺は素早く右足を一步前に出すと、右腕を離して左腕を木刀ごと突き出した。狙うはオッサンフェイス。

木刀の剣先は見事に狙った顔面の中心にヒットすると、オッサンフェイスは「うつー！」と小さな悲鳴を上げて飛んで行ってしまった。

下に座っていた青年は般若の面で表情は見えないが、驚いたような素振りを見せた。が、そんな事はどうでもいい。俺は左手で木刀を持ったまま手首を使って小さく振りかぶつて、振り下ろした。手首だけの振り上げだが、効いただろう。

般若の面に輝が入り、青年は正座のまま上半身だけ後ろに倒れた。その体勢、さぞ太腿の筋肉が伸びるであろう。

ここで追い討ちをかけてもいいのだが、生憎そんな事をしている時間もない。

俺は木刀を持ったまま足元に注意しながら進んで部屋のドアを開けると静かに、だが力強く睨んだまま、

「出て行け」

と言った。

かなりの大ダメージを負ったであろう二体は小さくコクンコクンと怯えた様子で額くと一目散にドアから出て逃げていった。とても素早い動きだつた。

俺は二体が見えなくなつたのを確認すると、自分も部屋から出てトイレへ向つた。

あの二体はやはりお化けか幽霊の類だらう。木刀で殴る事が出来た即ち触れる事が出来るというのは意外だった（実はあれは威嚇のつもりだったのだ。でも殴れる事が解つたので般若の野郎にも一撃喰らわせてやつた。）。人間ならば逃がさずすぐに通報してやるのだが、幽霊が不法侵入したなどと書いてみる。悪戯だと思つてすぐ電話を切られてしまうだらう。

お化けや幽霊は人間を呪うというが、もし今の俺の行動に腹を立

てて逆恨みとして親を呪つたとしても、それは結構な話だ。是非ともやつてやつてくれ。俺に危害を加えない限りは黙認してやろうではないか。

トイレとは部屋を出て廊下を歩いたすぐの所にあるので、距離いう距離はないのだが、一度外に出なければならないのが困る。夏なども暑くて嫌なのだが、この時期、外には雪が積もっている。それぐらいの寒さをたかだかトイレに行くだけのために耐えるというのはかなり厳しい。

俺はトイレに入ると洗面器の前に立つた。

洗面所は母屋に行けばいいのだが、母屋に行くと親と妹に顔を合わせる事になる。それだけは避けたい。だからわざわざ俺の部屋である離れにあるトイレで顔を洗わねばならないのだ。面倒だが、面倒なんて思えない。

冷氣によつて冷やされた蛇口を力一杯捻ると、チョロチョロとだが水が出た。日によつては凍つてしまつて水が全くでない、どころか蛇口が動かない時があるのだが、どうやら今日は大丈夫らしい。

両手で水を掬つて顔を洗う。

とても冷えた水で洗つてゐるので眠気など一気に飛んで言つてしまつ。

夏は生ぬるくて気持ちが悪いだけなのだが、その点で考える

と冬の唯一の利点だらう。

とは言つものの、眠気などあの妙な二人組みによつて吹つ飛ばされてしまつたが。

「何だつたんだろ・・・・・アレ」

俺は濡れた顔を側に置いていたタオルで拭う。そして髪を整えようと頭を上げて鏡を見た。

見た のだが、

「・・・・・誰？」

鏡には妙なものが写つていた。

また、妙なものだ。

顔も首も肩も鎖骨も、全て俺なのだが一つだけ違う点があつた。

正確には二つだ。

まず髪の色が変わっていた。綺麗とは言えないが日本人丸出しの黒髪が、欧米人顔負けの金髪になっていた。透き通り、光に反射して綺麗な輝きを放つ金髪に。クネクネと波打つようにうねった髪の癖は変わらぬのだが、試しに触つてみると驚くほど触り心地がよかつた。痛んでいないうちにサラサラである。まるで自分の髪でないようだ。だが、まあこれはいいとしよう。髪の色が変わったのは嫌だが、綺麗なのはいい。

それよりも残りの問題点だ。その綺麗でサラサラな髪のテツペン俺の頭の頭頂部に可愛らしい金色の二角形がくっ付いていたのだ。

まるでそれは

猫耳…? キュートな猫耳だつた。

猫耳と表現したが、犬かもしれないし、馬かもしれない。もしかしたらキリンの耳かもしれないが、確実に動物、若しくは獣の耳だった。

女の子がつけたらそもそも可愛いのだろうが、俺の場合全く似合っていない。

試しにこれも触つてみた。触り心地は意外にも柔らかく、そして何だかこそばゆい。まるで自分の身体の一部を触つているような感覚だ。どうやらただ付いているだけではなく、神経も通つているらし

「さつきの般若野朗とオツサンフエイスだけでなく、猫耳つて・・・」

意味もなく耳をピョ「ピョ」「と

可愛くもなんともない。

今日は妙な事が起こりすぎている。別段、妙な事だろうが奇怪な事だろうが非現実的な事だろうが、俺としてはウェルカムなのだが

不可解なのは少し困る。ミステリーだけでなくファンタジーでも序盤は謎ばかりだ。それらを徐々に解いていくのが物語りの面白い所だ。解っている、それは解っているのだが、ここは残念ながら現実世界だ。日常の一部なのだ。謎ばかりが増えていつては、日常生活に支障をきたす。別にお化け又は幽霊が見える分には問題はない。無視をしていればいいし、危害を加えるようなら先ほどのように此方も攻撃すればいいのだからだ。

だけど、だ。

この猫耳は困る。

いくら俺が無視しても周りが無視してくれないし、身体の一部らしいので千切るというわけにもいかない。決して頭がいいわけではなく、寧ろ力ずくが大好きな俺にこれをどう対処すればいいのだろう。冷静でいるだけでも我ながら大したものだとうに。これでは学校どころではない。

でも行かないわけにもいかない。今日無断欠席すれば生徒指導の対象になるのは必至。それだけは絶対に避けたいのだ。

「面白すぎて笑えねえよ

ニット帽を被つて一日を過ごすしかないわな。

俺は大きな溜息を一つ、ついてから歯ブラシを咥える。そして洗顔から歯磨きに行こうした。

歯磨きをしながら、ふと、視線を鏡の隅に移すとまたまた妙なものが見えた。鏡越しなので、実際に見ていいと何も言えないが実際に見てもやっぱり妙だった。

俺の隣に小さな、年齢は小学生ぐらいだろうか、おかっぱ頭の小袖を着ている女の子が立っていた。前髪も、もみあげも、裾も、全てが真っ直ぐ切り揃えられており、小袖も綺麗なせいでのまるで日本人形のようだ。

夜になつたら髪伸びそうで怖いな・・・・・。

俺にこんな小さな妹はないので、恐らくはあの般若野朗とオッサンフェイスの仲間か、少なくとも同類ではあるだろう。

一応、話しかけてみよう。

「あのーお嬢ちゃん？迷子か何か？」

「何が面白いの？」

どうやら日本語を使うようなのだが、『ノリコニケーション』能力に欠けるらしい。女の子が言っているのは先ほど俺が呟いた「面白すぎて笑えねえよ」に対しての問い合わせだ。

「いや、それは皮肉つていうか、本当は全然笑えない事ばかりなんだけど・・・・」

「そーなんだ」

何が面白いのか、何が楽しいのか、女の子はニコニコしている。

こつちは苦笑するしかないというのに

俺はこれ以上会話をしている余裕はないので（時間的には凄く余裕はあるのだが、精神的にはまったく余裕はない。）、歯磨きを中心断して自分の部屋に戻った。

相手は化物か幽霊だ。さつきの般若野朗＆オッサンフェイスにしたように木刀でなぐつてもいいけれど、流石に小さな女の子相手にあんな事が出来るほど、腐つても、落ちぶれても、人間失格でもない。放つておけば勝手に出て行ってするだろう。

部屋に戻るとすぐにフィクションと物語の山からニット帽を探し出して猫耳を隠すように被つた。そしてマフラーと手袋を装着すると、隅に置いていた筆箱しか入っていないカバンを手に取つて家を出た。

「フハハツ」

この時、俺は気付いていなかつたのだが、部屋にはあの武器にま二体だけでなく、実はもう一体居たのだ。

ソイツは俺が出て行つたのを確認するとすぐに姿を現して 言つた。

「今時珍しく肝の据わつた男じやな。驚きもせず真つ先に剣を取るとは加えてあの太刀筋。少なくとも素人ではないらしいようじやが、これは、もしかしたら面白い拾い物だつたかもしれんの」

ソイツは怪しく、
妖しく、そして美しく笑つた。
フハハツ、と。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9865v/>

ミスプリント

2011年8月21日03時12分発行